

プロローグ

人がいなくなった十九時のオフィス。

パソコンの光だけが妙に眩しく感じる空間に、私は居た。

——ここだけやったら、帰ろう。急がないと間に合わなくなっちゃう。切れかけた集中力をなんとか引き留めて姿勢を正した、その時。

「早瀬」

背後から低い声が聞こえた。振り返る前に、どきりと心臓が跳ねる。

「か、神楽坂課長……まだ残ってらしたんですか」

「お前もな」

涼しい顔でそう返されて、曖昧に笑うしかなかった。

長めの前髪は真ん中で分けられ、形の良い額が覗いている。

切れ長の眼は鋭く、冷徹さと知的さを醸し出している。長い睫毛に通った鼻筋。ブランド物に疎い私でも、隙なく身に付けたスーツが一級品だという事は分かる。おそらく、その左手首に収まる時計も。

とんでもない美形だ。こんな時でも見惚れてしまうくらいに。

「これだけやってしまいたくて。も、もう帰りますから……！」

「そうか」

——怖い……っ！　なんで今日に限って残業してるの？　いつも定時で帰ってるのに……っ

労いに来たわけではないのか、沈黙が訪れる。

さっさと作業を再開したいのに、真横に立たれていてはそうもいかない。一体何の用があつて私に声をかけてきたのか。

そろそろとキーボードに指を乗せた時、威圧感のある低音が告げた。

「これの確認だけしておきたい」

「はい……？　——っ！」

差し出されたスマホの画面に、言葉を失った。

——な……っ、うそ……!?

そこに映し出されたのは、私。それも裸同然でカメラの前で脚を開き、卑猥な玩具を押し付けている姿。

紛れもなく、私の配信画面だった。

「……これ……は」

「うちは副業禁止規定がある。知ってるよな」

淡々とした声。責めているわけではないのに、それが逆に怖い。膝の裏が冷たくなって、椅子に手をついてしまう。

「これをこのまま見逃せば、君は懲戒対象になる」

——終わった……

このままではクビ。ただでさえお金に困っているのに、今クビを切られたらどうなるかなんて、火を見るより明らかだ。

恥ずかしさと絶望感に、震えが止まらない。課長のスマホの音量が切られている事だけが、唯一の幸이었다。

「黙っておいてやる方法が、一つだけある」

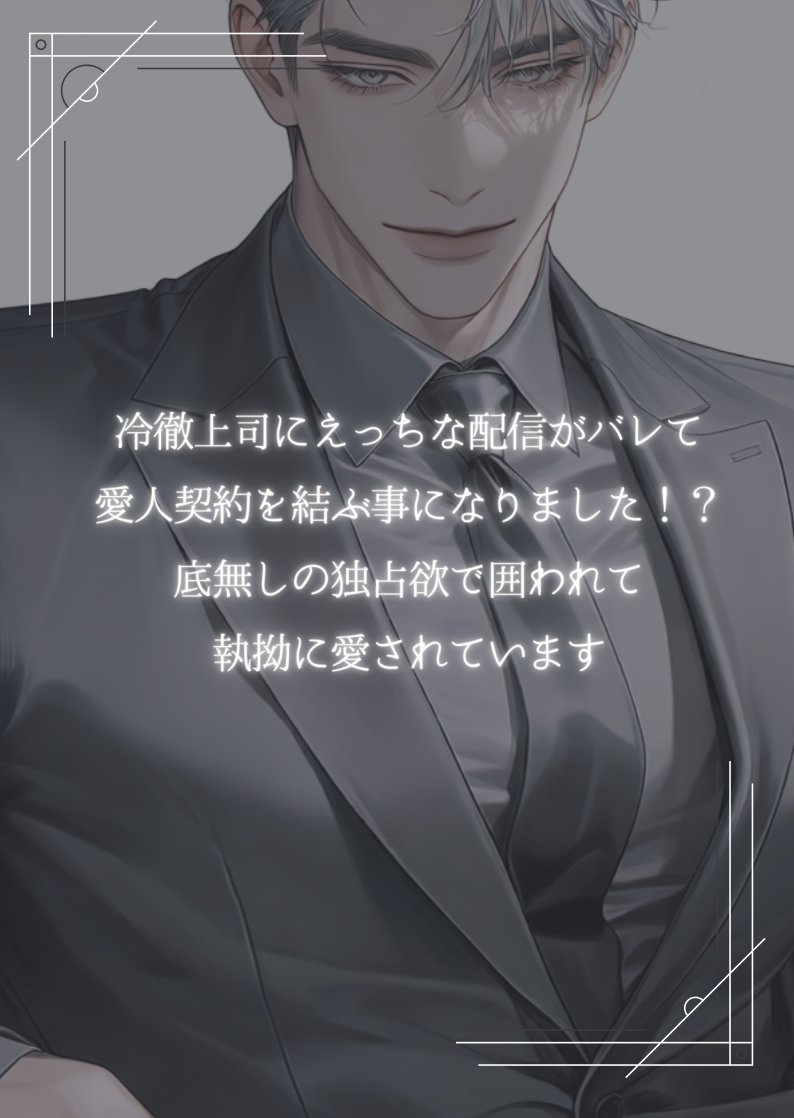
「えっ……」

言葉を切った神楽坂課長の目があやしく揺らめく。

血の気の無いいつもの目のはずが、ほんの一瞬、苛立ちに似た熱を帯びた。

「俺と——」

その言葉一つで、私の人生はひっくり返ったのだった。



冷酷上司にえっちな配信がバレて
愛人契約を結ぶ事になりました！？
底無しの独占欲で囲われて
執拗に愛されています

「うう……終わらない……」

パソコンの画面を睨んで、ひたすらキーボードを叩く。

昼休みがもう15分も過ぎている。

——くう……っ！　なんでこんな急ぎの仕事を急に持ってくるかなあ……今朝急に苦手な先輩が「コレ、14時まで直しといて」と投げってきた事に目を剥いた。どう考えても、この量をその時間までに終わらせるなんて無茶だった。しかし当然「無理です！」とは言えず、自分の仕事そっちのけで取り掛かる事になったのだ。

——わ、私の担当分だって、明日の朝までには終わらなきゃいけなかったのに……！　あの人いつもいつも、胸ばかり見てくるし、本当苦手……っ残業が確定したのだから、恨み言のひとつも言いたくなる。

「——おや」

人気の無いオフィスに響いた声に、ぎくりと指が固まって止まる。
コツ、コツと足音が近付いてきて、私の席のすぐ後ろで止まった。

「もう戻ってきてたのか。昼休みはまだ半分以上あるが」

「課長……」

一番見つかりたくない人に見つかってしまった。

神楽坂課長が怪訝そうな顔で、こちらを見下ろしている。

相変わらず、立っているだけで絵になる美丈夫。しかしその声や目は常に冷やかかで、威圧感も人一倍だ。流石、異例の速さで課長まで昇進した人はオーラが違う。手の届かない場所で輝く人。神楽坂課長はそういう種類の人だ。

その神楽坂課長が形の良い眉を、ぴくりと動かした。

「……違うな。昼休みを未だ取っていない、そうだろ？」

「……う。……はい」

——まずい、叱られる……

合理性を何より重視する人だ。昼休みを返上してまで仕事をしていたら、何か言われるに違いなかった。正確に言えば私の仕事ではないのだが、そんな事を気にして貰えるとは思えない。

切れ長の目が私から逸れて、パソコンの画面に移る。

表示されている数字や文字を見て、その眼光が一段と鋭さを増した。

「これは、君の担当ではないんじゃないか？」

「えっ……あ……はい、そうなんですけど……」

押し付けられました。とは言えず、曖昧な返事になる。

訝しげな目で見られて、心臓がきゅっと冷たくなる。何も言わずに大きな

身体を屈めて、モニターを覗き込んできた。仄かな苦味を帯びた大人っぽい香水が淡く香る。叱られる、と身構えていた分、この距離の近さにドキドキした。

「……やっぱり。押し付けられたのか」

「お、押し付けられたというか……」

「君はいつもそうだ。少しは他人の要求を跳ね除ける事を覚えた方がいい」
マウスを操作する手が大きい。無駄な肉が一切なくて、ゴツゴツしている。指も長くて、お手本の手みたい。

——いけない、手ばかり見ちゃった。

ぱつと視線を上げると、課長と目が合った。

「……ッ」

「……彼にはこちらから注意しておく。それから君も、何でもかんでも引き

受けないように。営業事務は営業より立場が下なわけではない」

そんな風に思っていてくれたなんて。

咄嗟に言葉が出てこなくて、少しだけ喉が詰まった。

「あ……はい。すみません……」

業務内容としての立場の差から、必要以上に卑屈になっていたのは事実だったから。

「ああ、勿論君の名前は出さないから、安心していい」

「えっ」

「あとは俺がやっておくから、君は休憩に入ること。今からなら何か軽く食べるくらいできるだろう」

ゆっくりと身体を起こした課長を見上げる。下から見上げたこの角度でも格好いいとは、一体どういう事なのか。

そんな男が自分に便宜を図ってくれている。これで感激しない方が無理だ。

「あ、ありがとうございます……！」

「……いいから。早く行きなさい」

椅子の背凭れを軽く叩かれて、そのまま立ち上がる。

財布だけを引っ掴んで、ぺこぺこ頭を下げながらオフィスを飛び出した。

——あんな顔も、できるんだ……

去り際に見えた課長の目がいつになく優しげで、胸の奥が奇妙に熱くなるのを感じた。

神楽坂課長のおかげで、何とか残業を回避して帰宅した。

帰り際に先輩から恨めしそうな目で睨まれたけど、気が付かないフリをした。明日の事は明日の私に任せよう。

そうして辿り着いた自宅のベッドで、私は陰鬱なため息を吐いた。

「はあ……」

眺めているのは通帳アプリ。給料日だと言うのに、大して増えない残高。

奨学金と仕送りを引けば、残るのはこれだけ。それでも、今月も無事に仕送りできてよかった。お父さんも最近は調子いいみたいだし。

「それにしても、思ってたよりずーっとお金かかるんだもんなあ……」

独り言が部屋に寂しく響く。

就職と共に地元を離れ、手に入れた私の城。小さな1Kのくせに、家賃は

それなりにする。都会は生きるだけでお金が掛かるのだ。

——まあ、それを選んだのは自分なだけだ

それに、今日は仕事でもなんだか救われたような気分だった。

神楽坂課長が、普段の働きぶりを評価してくれたから。私の事なんて大して気にしてないと思っていた分、余計に嬉しい。

「格好よかったなあ……」

ほう、と甘いため息が溢れる。今まではただ怖い人だと思っていたのに、あれだけの会話でここまで変わるものなのか。自分のチョロさが嫌になる。

——でも嬉しかったのも、格好良かったのも本当……

手を翳してみる。なんの変哲もない、平均的な女の手。自分で施した桜色のネイルすら普遍的だ。

「……男の人の手って、みんなあんなに大きくて格好いいのかな」

昼間に見た手を思い出して、芋蔓式にあの香りまで呼び起こされる。変な想像をしてしまった罪悪感に、頭を振った。

「~~~~ッ。いけない、早く準備しなきゃ」

狭い部屋に堂々と陣取るのは、眩く光るリングライト。その中央のカメラに上手く入るように座って、顎から下しか映っていない事を確認した。服を脱いで見えないところに置いておく。手が届く場所にローションや卑猥なおもちゃを並べた。

「さて、……がんばろ」

深呼吸をして、配信開始のボタンを押す。ちらちらとコメントが流れ始めるのを確認して、剥き出しの胸の横で手を振った。

「こんばんは、〃サクラ〃です。今週もみんなお疲れさまでした。もうお仕事終わりましたか？」

精一杯愛想のいい声で、カメラに向かって話しかける。その間も脇を閉めて胸を寄せるのを忘れない。他人より大きい胸が、ぐにゅ……♡ と歪むと、チャット欄が少しだけ賑やかになった。

「あ、そうなんだ。みんなお仕事お疲れさま。……うん？ あ……ふふ、乳首勃ってる？ そうなの、楽しみでそうなっちゃったみたい」

両手で胸を持ち上げて、伸ばした指で乳輪を挟んでぷっくりと膨らんだ乳首を主張する。ぽんぽん、と有料スタンプが流れたのが、目の端に見えた。

「わあ、チップありがとうございます♡ ……あ、今来てくれた人達もお疲れさま。今日は前から気になってたおもちゃを使ってみるので、よかったら最後まで見て行ってね」

大人気配信者、というわけではないから、ある程度コメントは拾える。

お金に困って始めたこの配信は、それなりの収入になっている。もちろん

大金が振り込まれる訳ではないけど、少なくとも家賃の支払いや急な飲み会に頭を悩ませる事はなくなった。

しかし抵抗や恥ずかしさが消えたわけではない。

——そもそもこの胸のせいで、会社で嫌な思いをする事だってあるのに。厭う対象でしかなかったはずのものが、こうしてお金に変わるのは皮肉な話だと思う。開き直ったつもりでも、時々ふと虚しくなる夜がある。それでも、この収入は惜しい。

会社は副業禁止だから絶対顔出しはしないし、身バレの心配はないはず。——固定の人も、よくて二十人って感じだしね。

寒さで勃ってしまった乳首を軽く撫でつつ、コメントに返事をしていく。

「……え？ 今帰宅中？ 待って、待って！ お外でこんなの見ちゃダメですよ。お家まで我慢してー！」

冗談か本気が分からないコメントに応えつつ、胸を隠して見せる。もちろん、抱えたせいで深くなった谷間を見せるのも忘れない。

ちらりと見た画面では、視聴者が二十人を超えている。私はようやく、用意しておいた玩具をカメラに見せ付けた。

「……はい、じゃあコレで今日はオナニーしちやおうと思います……♡」

ぽつてりと丸みを帯びたクリトリス吸引パイプに、コメントが俄かに沸く。紺色のそれは、昨日届いたばかり。

「結構重くてびっくり。……で、ここが吸引する部分。わ、振動もすごい強い」

起動すると鈍い音を立てて、ぶるぶると玩具が震えだす。玩具の威力を示す為、しばらく視聴者に見せる間も視線は流れるコメントを追った。少しでも投げ銭してもらうには、小まめに拾わねば。

焦れたコメントが増えてきた頃、大きなビーズクッションに背中を預けた。膝を立てて脚を開く。隠すものがない秘部を晒すと、有料チップがいくつか飛んだ。

「チップありがとうございます、嬉しい♡ 大きくて不安だから、ローション使うね」

とろお……♡ 晒したそこにローションを垂らす。

少しでも卑猥に見えるように、ぬちゃぬちゃと音を立てて塗り付けた。白々しいライトを浴びながらこんな事をしている恥ずかしさに、下腹部がきゅんと疼く。

「っうあ……ん……っ……もう熱くなっちゃってます……♡ はあ……もう当てちゃおうかな……？」

煽るコメントに応えて、小さな吸引部分を、そつとクリトリスに当てがう。

——ん……つまだ勃ってないから……難し……。これであつてるのかなぬるぬると滑るし、よく分からない。手探りでスイッチを入れた。

「ッあ!♡♡」

途端に、ぢゅぽぽぽ♡ 卑猥な音が響いて腰が大きく跳ねた。

——ッ♡ これ♡ やばいかも……っ♡

小さな淫みが小刻みにクリトリスを啜り上げる。ぢゅぽぽ♡ ぢゅぽ♡ ローションを巻き込んでそうされると、あっという間にクリトリスが勃起した♡

「ッは、ああ……っ♡ あッ♡ 待っ、て♡ これダメ……っ♡♡」

刺激が強過ぎて腰が浮く。閉じようとする脚をなんとか開いて、カメラに見せ付けた。チャット欄はそれなりに盛り上がっていて、有料チップが流れていくのも見える。

「は♡ ツあ♡ ああ、あ……っ♡」

『エロ』『もっと押し付けて』『腰浮いてて草』等、好き勝手言われている。ゾクゾクと身体の内側に熱が走って、ナカがぎゅっと締まった。

——こんな姿を見られて興奮する様になったの、本当に恥ずかしい……っ♡ お金の為にやっている筈なのに、すごく気持ち良い。ぐう……っ♡と玩具を押し付けて、更にゆっくりと円を描くように動かした。

「んああ……っ♡ すご、い♡ クリ……っ♡ びりびりする、う……っ♡ あ♡ あっ♡ うう……っ♡」

ちゅぞぞぞ♡ ぢゅぼっ♡ ぢゅぼぼぼ……っ♡

ローションのお陰で、良い感じに卑猥な音も大きく響く。びくん、びくん♡ 腰が跳ねて、内腿に力が入った。

「あッ♡ あっ♡ あう♡ もういく♡ いくいくっ♡ いきゅ、……っ♡」

……ッ♡♡」

演技でもなんでもなし。強制的に気持ちよくさせられて、簡単にイク……♡
せめてその姿で投げ銭を貰おうと、浅ましく腰を浮かせた瞬間。

——っあ、やだ、なんで……っ♡

何故か昼間に見た神楽坂課長の、あの優しげな顔が浮かんだ。罪悪感混じりの快感が一気に膨れ上がる。

「ッああ♡　っあ♡　んは、ああ……ッ♡♡」

びくびくッ♡　びくん♡　腰が震えて、頭まで快感が沁みってくる。感じる
ところだけを機械で刺激して得た単調な絶頂なのに、ちゃんと気持ち良いの
だから困る。

視聴者を喜ばせようと、へこ、へこ♡　腰を振りながら、ゆっくりと力を
抜く。

「っふ、うう……ッ♡」

チャット欄を気にしつつ、玩具を持ち直した。

——……っ 罪悪感すごい……。あとは挿れて、イッたらおしまい……。潮吹けたらいいけど……

未だ冴えている頭では、少しでもお金を貰おうと打算的な考えが浮かぶ。浮かんだ神楽坂課長の顔を振り払うように、ずしりと重いパイプ部分を、ぬぢゅ……。♡ と押し付けた。

♡ ♡ ♡

吸引パイプで配信した翌々日、私は結局残業していた。

この間は神楽坂課長のお陰で回避できたけど、毎回そうとはいかない。人

目につかないように回された厄介な作業に手こずり、こんな時間になってしまっていた。

——こんな時間の方が捗るのもどうなの、って感じだけど。

他人に気を取られない分、作業の進みが速い。気が付けば残業仲間は全員帰り、一人になっていた。

静まり返った十九時前のオフィス。聞こえるのは自分が立てた物音だけ。

「……んんっ」

ぐぐ……っと伸びをする。疲れた頭はもう大して動いていない。けれど、まだ切り上げるわけにはいかない。押し付けられた仕事のべ切は明日の朝なのだ。

「……なんでこうなっちゃったんだろ」

独り言と一緒に、苦い記憶が顔を出す。

入社したての右も左も分からない私に丁寧に仕事を教えてくれたのは、あの先輩だ。あの頃の私は彼が優しい人なんだと、疑いもしなかった。

——告白を断るまでは……ね

それを皮切りに、態度は豹変した。

直接何かされるわけじゃない。ただ、廊下ですれ違う時の目線とか、業務連絡の素っ気なさとか。そういう小さな変化が積み重なっていっただけ。仕事を押し付けられるのも、その延長線上のことだと思えば。

ただ、休憩室の壁越しに聞こえた声はかなり堪えた。

『やり目に決まってるんだろ』

あの一言だけは、未だに耳にこびり付いている。

——もうどうしようもないけど

どれだけ優しくされても、いつでもその視線が胸元に向くような人と付き

合いたいとは思えない。

肩をぐりと回して、パソコンに向き直る。神楽坂課長から声を掛けられたのは、その時だった。

「な……何を言ってるんですか……？」

「そのままの意味だが」

絶句とはこの事。人間、思わぬ事態に陥ると思考が止まるらしい。

お金の為にやっている配信がバレた上に、究極の選択を迫られている。私のちっぽけなキャパはもう限界だった。告げられた言葉を、ただ反芻する。どうか夢であってくれと願いながら。

「副業を黙っている代わりに、課長の愛人になれ……と」

「違う。君の借金を俺が肩代わりする代償に、だ」

何が違うのか。いや違うか。

とても彼の口から出たとは思えない言葉に、くらりと眩暈がする。

愛人？ 私、課長の？

机に片手を付いて、課長はその美しい顔を私に近付けた。

「副業は辞めてもらう。金の為やっているのなら、その金に困らなければやらないという事だ」

「いや……でも、私実家に仕送りもしてて……それを止めるわけには……」

そんな事か、とでも言いた気な顔に喉が詰まる。

猫に見つかったネズミって、きつとこんな気持ちなんだろう。無駄だと分かっているのに、逃げ道を探してしまう。

「仕送りは今まで通り続けたらいい。代わりに君の生活費を俺が負担しよう」

「ど、どうして……」

「どうして？」

片眉を跳ね上げる彼は、珍しく言葉を探すように目を瞬いた。けれど言葉に詰まる事なく、すぐに滑らかな低音が流れ出す。

「自分の部下がいかかわしい副業に手を染めている事実が許せないからだ」

「そ、それだけ……ですか？」

そこで初めて、神楽坂課長が視線を外した。張り詰めていた緊張がほんの少しだけゆるんで、私は小さく息を吐いた。

「それに……女性が傍に居ると都合がいい」

「都合がいい……？」

「……ああ、この歳になると両親が煩くてね」

それきり、彼は言葉を続ける気はないようだった。でも、その言葉だけで

察するに余りある。

課長ほどの美貌を持ち、出世街道を突き進むエリートとなれば、周りの女性が放っておかないだろう。そしてそれを喜ぶタイプでない事は見ていて明らか。

——女避けて事ね……にしても、愛人って……

恋人にする程の好感度はない、という事か。変に愛情が無い分、拗れないかもしれない。問題はその内容だ。

「で、でも……お金を都合して貰えるほどの事、私にはできません……！」
「何を言っているんだ」

「え？」

長い指が、机の上にあるスマホの画面をタップする。

紺色のパイプを咥えて腰をへこらせる自分の動画に、頬がカッと熱くなっ

た。

「これを、俺相手にしてもらう」

「へ、え……っ!？」

禁欲的な様相からは想像もつかない言葉に、間拔けな声が出た。

「まさか、愛人の仕事が何か分からないわけじゃないだろ？ それに、こんな不特定多数に見られるリスクを負う必要もなくなる」

「それは……」

「身元がハッキリした人間が相手だと、安全性は段違いだ。しかも入る金額は今以上。副業が原因でクビになる事もない」

言い返す隙がない。それどころか、聞けば聞くほど最善の道だと思える。

——で、でもこんな上手い話あるわけ……

悲しいかな大して良くない頭を必死に回しても、他の方法なんて思いつか

なかった。

整った顔が不意に、ぐっと近づく。ほんのりと苦味を感じる香水の匂いと、鋭い眼光に絡め取られて息も出来ない。圧倒的強者にそうされると、瞬きをする事すら躊躇われる。

「——で、どうなんだ？ 契約するかしないかは、君の自由だ」

威圧感とは違う圧力。例えるなら強烈な色香。有無を言わせない声に、私はクラクラと揺れる視界から逃れるように目を閉じて、頷いた。

「……よろしく、お願いします……！」

「よろしい。……契約成立だ」

——え？

頬にひんやりとした指が触れて、上を向かされる。瞬きをひとつしている間に、唇を奪われた。

「……ッ！」

隙間無く重ねて、吐息ごと喰われる。驚いて閉じようとした唇を舐めた舌がそのまま入ってくる。舌の表面を舐めて上顎をくすぐる。逃げようとした瞬間、手が頬から後頭部に移動して捕まえられた。

「っふ……う、んん……ッは、……っあ……」

「――顔を背けない。口を開けて」

低い掠れ声に逆らえない。恐る恐る口を開けると、褒美を与えるみたいに甘く吸い上げられた。分厚い舌が口の中を満たして、唾液を混ぜる。ぐちぐちと響く水音に、頭の芯がジンと痺れた。

――あ……なにこれ……きもちいい……かも……

何もできないまま口内を好きにされる。意識が蕩ける寸前で、顔が離れた。

「は、……あ……」

「シ……、いいな。さて、行くぞ」

「行くって……どこに……？」

初めてキスをしたとは思えない涼しげな顔。こっちは息も上がって、頭もぼんやりしてるというのに。

指で唇を拭って、その手で私を立ち上がらせる。そして彼はまた驚くべき事を口にした。

「俺の家だ。これからは君の家でもある」

帰り支度もそこそこに、手を引かれるまま課長の車に乗せられた。連れて行かれた先は高層マンション。聳え立つ外観だけでも驚愕だったのに、室内はその上を行った。

——な……なにこの家……そもそも家なの？ ショールームとかじゃなくて……？

リビングに足を踏み入れた所から、一步も動けない。

黒を基調とした部屋には生活感がまるで無く、インテリアには曇りさえ無い。充分に空調が効いている筈なのに、寒々しささえ感じる。

「何をしている。上着を貸さない」

「えっあ、はい……あの、課長」

弾かれるようにして脱いだジャケットは、簡単に取り上げられた。それを

片付ける課長は視線だけで返事をする。

「その……ここが私の家……というのは、どういう事なんでしょうか……。
あの、出来れば自宅に帰りたいんですが……」

「駄目だ」

とりつく島もない。どうしてか彼は私が自分の家に帰る事を、酷く嫌がっている。

——なんで……逃げると思われてる？

普段から何を考えているのかよく分からない、と思っていたけど、ここまでは。

逃げたとして、ただ私の副業を上を報告すれば済む話なのに。何がそんなに嫌なんだろう。

逃げる選択肢なんてない。元より、逃げると言う発想自体がなかった。

「あの……課長。私逃げませんから。だから話を……」

ジャケットを脱いだ神楽坂課長が、こちらを向く。ネクタイを緩める仕草が絵になり過ぎて直視する事ができない。思わず目を逸らすと、顎に長い指が絡んだ。

「……っ」

「逃げない保証がないだろう。まだただの口約束な以上、この家を出て自宅に戻り……またあの配信を始めるかもしれない」

「し、しません……っ！ 元々好きでやってたわけじゃ……お金のためにやってた事ですから……っ」

「ほう」

——く、全く信用されてない……っ

冷ややかな眼差しは、私の本心を見ようとはしていない。

悲しみより、何とかして対話を試みたいという気持ちの方が強く湧き上がった。どうせ監視されるのなら、せめて良好な関係でいたい。

「……まあ、それに関してはお互い様か。金は後日……なるべく早く振り込もう。奨学金の返済も速いに越した事はない」

「ほ……本当にいいんですか……？」

「俺がこんな汚い手で君を騙すとしても？」

ふ、と口元を緩めて自嘲気味に笑う。その悪役じみた表情が、とんでもなく様になる。けれど私には他の道を選ぶ余地なんてない。顎を捕らわれたまま首を振る仕草をする。柔らかな目を細めた神楽坂さんの顔が、ゆっくりと近付いた。

「よろしい。……それから、課長はもう辞めろ。家でまでそれで呼ばれたくない」

「わかりました……」

「――結衣」

「っあ……」

不意に甘く名前を呼ばれて、喉が震える。

そのまま唇を塞がれて、正体の分からぬ熱が背中に這うのを静かに受け止めた。

「っん……ッ……ふ、う……っあ……」

寢室に移動して、もう随分長いこと口の中を嚙られている。

舌の根が痺れて呂律が回らない。あふれる唾液を飲み込んで、一方的に貪られる為に舌を差し出すのが精一杯。

——あ……頭……ぼんやりして……♡ 口の中も、もう……ぐちゃぐちゃで分かんない……♡

とつくに腰は抜けていて、抱えられているから立っていられる。

ぬぢゅ、ぐぢゅ……♡ 響く水音に、きゅっとお腹の奥が熱くなる。

「——は……、……もうそんな顔をして」

「ふあ……っ、あ……♡ 神楽坂、さ……っん」

「なんだ」

息ひとつ乱さない癖に、その声には僅かに熱を感じる。軽々と私を抱え上げて、広いベッドに連れ込んだ。

薄い唇が私の首筋にキスをしながら、器用にブラウスのボタンを外していく。

——わ……本当にしちゃうんだ……

部屋に上がり込んでキスまでしたのに、まだそんな事を思う。次から次へと色んな事が起こって、頭が全然付いてきていないのかもしれない。

ぷつりとブラのホックが外れて縛めが解ける。重い乳房が、だぶんと溢れた。

「——……やはり、本当だったんだな」

鎖骨にある小さな二つのホクロに、乾いた指が触れる。呟く声には温度が無く、注がれる視線は焦げ付くように熱い。

——怒ってる……？

纏う空気に、わずかな落胆と強い苛立ちのようなものを感じた。

「あの……」

「もう二度とあんな真似はさせない。これからこの契約が続く限り……君は俺のモノだ。勝手な真似は許さない。いいな？」

「そんな……っあ、う……ッ」

「返事は？ ほら、出来るな？ それとも、そこから教えた方がいいか」

「ッふ、う……っ♡ あ、や……っ、分かりました……っあ、あう……っ♡」

きゅッと乳首を摘まれて、情けない声が出る。自分で弄ってばかりいたそこは敏感な上、外からの刺激に滅法弱い。

ひ……っ♡ 人に触られるの、やばい……っかも……っ……♡

手荒だったのは最初だけ。皮膚の表面を、すりすりと撫でる指は優しくて、

素直に膨らんでしまう。

「……ああ、もう勃たせて。まだ軽く触っただけなのに……随分感じ易いんだな」

「っう、う……♡ ♡ ♡ あ、ちが……」

「違う？ どこが」

「うあッ♡」

ピンッ♡ と強く弾かれて、大袈裟な程身体が跳ねた。遅れてやってきた恥ずかしさに、顔が熱くなる。真面目な顔で見下ろしてくる課長の顔が見れなくて、ふいと顔を逸らした。

「顔、逸らさない」

「ひ、っうあ、っあ♡ あッ♡ ア、待っ……♡ ちくび♡ 撫でるのやめ、

っ……え……っ♡」

くりくり♡ すりすり……♡

乾いた親指が乳首を捏ねては、側面を甘く撫で擦ってくる。むずむずと込み上げてくる快感に、あつという間に飲み込まれた。

あ♡ あ♡ だめ……っ 感じ過ぎて……っ♡ なんで♡ っあ、あ……♡
乳首すりすり♡ きもちい……っ♡

毎日顔を合わせる人とこんな事をしている背徳感が、感度を押し上げていく。

「止める？ どうして。腰を揺らして強請っているくせに……やめたら辛いのは君の方じゃないか？」

「え……っ、あ、うそ……お……ッ♡」

スカートの裾から、硬い手が入ってくる。下着を指が押し上げると、ぐぢゅ♡ と卑猥な音が鳴った。

「ほら、もう濡れてる」

「あ……っう、あ……やだ……っ♡」

「何も嫌がる事はない。いつものように、ここで悦くなればいい。それとも」
「んうッ！？♡」

ぐりっ♡ クリトリスの根元に中指が食い込む。濡れた下着を擦り付ける
みたいに、ぐりゅぐりゅ♡ いやらしく上下に指が動いた。

「玩具でなければ感じないか？」

「あ、っああ♡ や♡ あ、っ♡ んッ♡」

耳元で囁く声が頭の中に甘く響く。恥ずかしさと被虐心が、ゾクゾクと背筋を撫でた。

彼の唇からこぼれる吐息で耳朶が湿る。途端に抱かれている自覚が芽生えて、お腹の奥が、きゅう……っ♡ と疼いた。

「ひ、うう……っ♡ あ、っあ♡」

「ふ……、指でも充分みたいだな？ ここももうこんなに硬くして。……ああ、サクラはクリトリスを弄るのが一番好き、なんだったか」

「やああ……っ♡」

配信画面にいつも出している自己紹介文を口にされて、思わず顔を覆う。

恥ずかしくてどうにかなりそうなのに、ぐちぐち♡ 下着の上から遊ばれる度に、信じられないくらい気持ちいい。

「ひ♡ ツあ、あ♡ つよい……っ♡ ぐりぐり、だめです……っあ、ツあ♡う♡」

「こら、顔は隠さない」

「ッあ♡」

両手を掴まれて、そのまま頭の上で拘束される。

きつとすぐく間抜けな顔をしていたのだろう。

神楽坂さんは、至極満足そうに笑った。

「……ああ、いいな、その顔。あの配信中もそんな顔をしていたのか？」

「してな……っひ、ッ♡」

スカートをまくり上げて、一気に下着を下ろされる。とろお……♡ と愛蜜が垂れたのが自分でも分かった。

ぬりゅ……♡ 指がおまんこの谷間をなぞって、くちくちっ♡ クリトリスを裏側から弾く。くるくる♡ となぞられて、じっとしているなんて出来なかった。

「ッあ♡ あ、あう♡ んっ♡ ぐう♡」

「俺が見た動画ではここをかなり強く吸っていたが……甘やかされるのもイんだな？」

「いや……あ……ッあ　言わない、で……っ♡」

「今後の君の為だろう。ほら、どうされるのがイイのか、ちゃんと言いなさい」

勃起したクリトリスを中指と人差し指で挟んで、ちゅこちゅこ♡　甘く扱きながら言う。真面目な声に意地悪い笑みが隠れていて、その声が身体に染み込んでいく。

あ♡　あ……っ♡　この声聞くと……っ♡　身体之力抜けちゃう……っ♡　気持ちいい事しか、考えられなくなる……っ♡

ちゅこちゅこ♡　ぬりゅ♡　くるくる……♡　ちゅこ♡

「あッ♡　あ、あ♡　それっ♡　……ッ♡」

「これか」

ちゅくちゅこ♡　ちゅこちゅこ♡　ぬちゅっ♡

「んああっ♡ あッ♡ ツあぁ、っお……♡♡」

「気持ち良い？」

「あ、ッお♡ きもちッ♡ きもち、いっ……っ♡♡」

皮ごと上下に、しこしこ♡ されると、爪先に力が入って腰が浮く。

両手を拘束されて、脚を開いて。同じ事なのに、カメラの前でするよりも何倍も気持ちいい。ずりゅん♡ 指が滑った瞬間「ほォっ♡」と一際大きく啼いて、仰け反った。

「凄い声だな。普段からこんな声を他人に聞かせていたのか」

「あッ♡ あおっ♡ ちがっ♡ 今日、おっ♡ 変っ、変なの……っお、ッ

お♡ いく♡ あぁあッ♡ はやいの、だめえ……ッ♡」

「いつも真面目で健気な……大人しい人だと思っていたんだが、こんなにいやらしいとは思わなかったな」

「ッお、お♡ 待つ、え♡ あっあ、あ♡ いく、ぐう……っ♡♡」
降り注ぐ声が、余計に興奮を煽る。他人に見られちゃいけない事を、自分から一番縁遠いと思っていた人に見られている。その事実、どうしようもなく昂った。

ふう、と発情を孕んだ男の吐息が唇を撫でて、鼻先同士が触れた。

「俺の目を見て、いきなさい。蓮、と……俺の名前を呼んで、俺だけを見てイけ」

ぎらぎらと熱を滾らせた瞳に、胸がぎゅうつと締め付けられる。

れん、蓮。蓮さん。名前を呼ぶと、ぬぢぬぢっ♡ クリトリスを強く扱かれる。ご褒美みたいな刺激に、バチっと視界が弾けて。

「れ、んっ♡ 蓮さ……っ♡ いぐっ♡ イ、きゅ……ッ♡♡」
びくびくッ♡ びくんッ♡ おしゅっ♡ おしゅッ♡

全身が不規則に跳ねて、熱い潮が吹き出る。自慰とは比べ物にならない深い絶頂に、意識がじんわりと蕩けていく。

「……結衣」

「んう……ッ♡ ふ、う……♡ ぐんう……♡♡」

熱い唇が重なって、くちゅくちゅと唾液が絡む。身体の内側から思考も心もどろどろに蕩けて、感覚の全てが神楽坂さんの気配を拾った。この人の言う事を聞くと気持ちいいって、身体が覚え始めているみたい。

「は……。すまない、服は諦めてくれ」

「ふあ……。♡ あ……。っ♡」

「ベッドも、好きなだけ汚せばいい」

私の手首を捕らえていた手が離れる。見た事もないような荒々しい仕草で、脚を開かされた。

あ……♡ しちゃうんだ……ほんとに、戻れなくなっちゃう……♡ つ……
…すごい目してる……♡ つ♡ 神楽坂さんが、私で興奮してるの、嬉しい♡
私の膝裏を押さえる彼の手は熱くて、神楽坂さんがただの「男」になった
事を理解した。ギラついた目が私を見ている。その事実だけで肌が粟立つ。
配信を続けている内に、いつしか根付いてしまった性分だった。

「っあ、あ……♡ ツう♡ あ、あ……むり、大っき……♡ ツう♡」
「ッ、……力を抜け」

太いおちんぼが、みちみち♡ とおまんこを押し拵げながらゆっくり押し
入ってくる。息苦しさに喘ぐと、ぴん♡ と乳首を弾かれた。意識が逸れ
た隙に一気に貫かれる。

「ひ♡♡ あっああ♡ んお♡ ツぼ、お……♡ ひゅ、ご……♡
おちんぼ、入って、……♡♡♡」

「いちいち口にして……その癖も副業のせいかな？」

「あッ！♡ あっ♡ ごめ、っなさ……ッ♡ ああ♡ お♡ 奥っ♡ 深いの、お……ッ♡」

薄いゴム越しでも充分過ぎるくらい熱いおちんぽが、ずっぷりと埋まる。

玩具なんかとは違う生々しい質感に、おまんこがぴく♡ ぴく♡ 収縮した。

「結衣」

「ひ、ッん♡ あ、あ……っ♡ 抜け、ちゃ……っ♡

ずろろ……っ♡ と引き抜かれるとその長さを嫌でも理解してしまう。神

楽坂さんは右手を私の顔の横に付いて、獲物を狙うように目を細くした。

「二度と他人に見せてたまるか。……自分が誰のモノになったのか、よく理解しなさい。返事は？」

「は……っ♡ は、ああ……ッ♡ あッ♡ 分かつ♡ 分かりました……っ♡

あ♡ やっ♡ ツうう〜♡」

ぐち♡ ぐち♡ わざとらしく音を鳴らして、浅い所だけを捏ねられる。けれど一度深く満たされたおまんこはそれじゃ足りなくて、奥の方がズキズキと痛い程疼く。

はやく♡ はやく♡ 強請りたいのに、片脚を掴まれているせいで満足に動けない。お預けされた犬みたいにどんどん呼吸が速くなって、涙が滲んだ。「……はは、良いなその顔。自分じゃ好きな時に、好きなだけ気持ち良くなれるもんな」

「あ、あ……っ♡ 神楽坂さん……っ♡ あ♡ は——……っ♡ はあ……♡ ツう♡」

「違うだろう？」

「んっ♡」

ずり♡ 少しだけ擦られて期待に震える。発情して膨らんだ膣壁にめり込むおちんぼがドクドク脈打っていて、それが欲しくてたまらない。「結衣」と甘ったるく名前を呼ばれると、最も容易く唇が緩んだ。

「……っあ♡ れん♡ 蓮さんの、おちんぼ……っ♡ おちんぼください♡ 焦らすのやだぁ……っ♡」

「ああ、いい子だ。そうやって素直で単純な所が……いや、あまり褒めるのも良くないか。他人の言う事を聞かれたら困る」

「んうッ!♡ ツあ♡ あっ、あ♡ おッ♡」

「俺の言う事だけを聞いていればいい。他人の機嫌なんて取る必要ない。そうだろ?」

「ふぁ、……っい♡ おっ♡ お♡ ツふか、い、い……っ♡ あぁ♡」

どぢゅどぢゅ♡ ごりゅ♡ ぐりぐり……♡

これ以上無理だと思うほど深く重く、おちんぼが突き刺さる。子宮口周りの肉を、ぐにぐに♡ 捏ね潰されて、全身が戦慄く。

あー……♡ これ、しゅごい♡ お腹苦しいのに♡ 頭ずつと、しゅわしゅわして……♡ ばかになる……♡

「ッ……ああ、泣きながらそんなに締め付けて。苦しいのも好きなのか」

「あっ♡ あう♡ すき……っ♡ 好きに、なっちゃ……っ♡」

短く息を飲む音がして、ぐッ♡ とナカでおちんぼが質量を増した。ただでさえいっぱいなのに、更に広げられて息が詰まる。

驚いて目を見張ると、「フー……ッ」と獣じみた息が首にかかって、そのまま甘く噛み付かれた。じわりと滲む熱に、おまんこがキュッ♡ と締まる。

「あ、あッ♡」

「……絶対に逃がさない。二度と……」

「おッ♡ お、お♡ んあぁ……ッ♡ ひ、う♡ ツお♡ お♡♡」

ばちゅばちゅ♡ どちゅ♡ ごちゅ♡

低く唸るような声が喉に絡み付く。大きな身体に覆い被されて、身動きが取れない。くしゃくしゃになったスカートもブラウスもそのまま、殆ど真上から何度も何度も力任せに腰を打ち付けられる。

これやばい♡ いく♡ すごいイキ方しちゃう……♡ お、お♡ 子宮潰れて……♡ いく♡ イう♡

「お、ッお♡ いぐ♡ いく♡ ツあ、お♡ つお♡ ツ♡ イうう……♡♡♡」

ぶしっ♡ ぷしゅ♡ きゅうう……♡♡

深く抉られた拍子に、潮を吹きながら深いアクメを決める。精液を搾ろうとおまんこが、咥えているおちんぼの形が分かるほど締まった。深い官能に

襲われて、涙と涎がだらしく垂れる。けれど、のし掛かる男が止めてくれる筈もなく。

「んあッ♡ ああっ♡ お♡ 待つ、て♡ まら♡ まらイッて、るっ♡」
「だからなんだ。もう一回イけばいい。何回でも、氣をやっても止めてやる気はない」

「お、ッ♡ お♡ お——…っ♡♡ 漏れちゃう♡ 潮吹き止まんないの、お♡」

どちゅ、どちゅ♡ 突かれる度に、しよろ♡ しよろ♡ 潮が漏れてしま
う。

完全に馬鹿になってる。おまんこも頭も、全部おかしい……っ♡
散々な姿を晒して喘いでいるのに、注がれる眼差しがいやに優しく、熱
くて、全身で甘えたくなる。

両腕を伸ばせば簡単に触れられて、私は思わず、ぎゅっと抱き付いた。

「ッ、結衣」

「は、あ……ッあ♡ んお♡ おッ♡ おお♡」

ぐしゃぐしゃに乱れた服ごと深く抱き込まれて、一つの塊みたいになったまま揺さぶられる。頭の芯が幸福感に痺れて、どうにかなりそう。

「お♡ ッ……っああ、いぐ♡ イきゅ……ッ♡♡」

ごちゅごちゅ♡ どぢゅんッ♡ どぢゅッ♡ 一際強く穿たれて果てた瞬間、ぶびゅるるッ♡ 熱が爆ぜる感覚が来る。コンドーム越しに脈打っているのが分かった。

奇妙な満足感が指先まで満ちる中、額に指が触れた。

「……眠っていい。ここは、もう君の場所だ」

低い声が、前髪を撫でる指と一緒に降ってくる。

まるで壊れ物を扱うみたいなのその仕草に、胸の奥がきゅつとなる。

——ほんとに、これでよかったのかな……

契約のはずなのに。愛人、なんて呼ばれる関係のはずなのに。

こんなにも大切に触れられて、名前まで呼ばせて。

「——結衣」

寝入り端、また名前を呼ばれる。返事をする余力もなくて、微かに身じろぐだけで精一杯だった。

「……いい、寝ていろ」

まだ熱を孕んだ声が、いやに優しく聞こえる。

「——もう、離さない」

夢と現の境目で、そんな声を聞いた気がする。

空耳だったのかもしれない。確かめる間もなく、私は眠りに落ちていった。